研究者 × 研 究 × 学 生 #01

社会科教育とは何かを問い、考える。

教育学部／大学院教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学講座

●草原研究室

ゼミ生は、「社会を分かる・教える」を共通テーマに卒論と修論に取り組んでいます。ゼミでは、優れた論文を読みながら、研究の作法を身につけることを優先。基本文献の読み込みはもちろんのこと、学校の公開授業や研修会への参加、国内外のフィールド（教室）調査の企画に、学部生と大学院生が共同で取り組んでいます。研究室は、教育問題を語り合ったり、教育実習について相談したり、教員採用試験や大学院入試の対策を練る場にもなっています。

社会科教育の意義、必要性の根源を追究する。

入学後、最初の授業で、社会科教育の意義と必要性を学生に問う

大学1年次、私の最初の授業を受ける学生たちに、まず問いかけることがあります。それは、「今、あなたが子供たちから『なぜ、聖徳太子のことを勉強しなくてはいけないの、どんな必要性があるの』と聞かれたら、どう答えますか。その疑問に対する答えを、自分の授業を通して伝えることができますか。」というものです。おそらく、ほとんどの学生は、答えることができないはずです。私は、だからこそこれから学ぶ4年間でそのことを学んでいこう、と学生たちに語りかけます。これは、すなわち、社会科とは何か、なぜ社会科が必要なのか、社会科とはどんな人間を育成しようとする教科なのか、社会科教育の意義を根源的に考えさせる問いかけです。私自身は、社会科を学ぶ意味は、自分の意志で投票できる人間になること、つまり、良き主権者としての素養を身につけるための教育が社会科教育だと考えています。

資料や専門家の意見を比較研究し、社会科の根源を探究する

実は、社会科という教科は、戦後、新しく生まれた教科。すなわち、民主主義社会を実現できる人材を育てることを目的にした教科なのです。私が取り組んでいる教科教育学の研究テーマの1つは、どのような教科書やカリキュラムで、どのように教えれば子どもたちが社会科の面白さや必要性を感じられるか。そして、教師がどのように教えれば、子どもたちが社会科を学ぶ意味や価値を見出せるかについての研究です。そのために、日本、アメリカ、イギリスを中心に資料を収集。さらに各国の教師や専門家からの聞き取りや、カリキュラムの作り方などを調査し、比較研究します。その結果、どんな違いがみられるかを考察、違いが生まれた理由を探究していきます。こうした考察・探究の結果は、日本の社会科カリキュラムのあり方や、教科書の改善案などの提言につなげていきます。つまり、社会科の根源をグローバルに探究しつつ、それを実現するシステムと教材を開発していく研究だといえるでしょう。

実験的な調査を行って、教師の授業力について研究する

また、教師の授業力の研究も私の領域です。例えば、同じ教科書を使って授業を行い、教師によってどのような違いが出てくるのかの実験的調査を行っています。すると、教師によって授業の進め方や内容に違いがあることがわかりました。同じ教科書を使っているのに、なぜ、明らかに教え方の優れた教師とそうではない教師が現れるのか。私は、その理由は、教師自身が、自らに社会科とは何だろう、なぜ必要なのかという問いかけをしているかどうかにあると考えます。事実、そうしたことを常に考え、問い続ける教師と、そうでない教師の間には歴然とした差があることがわかってきています。こうした教師の授業力の比較研究と、授業力向上のための支援策づくりも、私の重要な研究テーマになっているのです。

自分の意志で選挙に投票・参加できる、良き主権者を育てることが社会科教育の使命。

准教授
草原 和博
Kazuhiro Kusahara

PROFILE

広島大学教育学部卒業、同大学院教育学研究科修了。博士（教育学）。兵庫教育大学助手、鳴門教育大学講師、助教授・准教授を経て、2009（平成21）年より現職。専門は教科教育学・社会科教育学。中でも地理的領域を中心に、世界各国のカリキュラムなどを比較研究し、社会科地理のねらいや本質を考察。並行して、地域学習や産業学習、地誌の授業計画書・教材の開発にも取り組む。

1 地理カリキュラムの日米比較の成果を専門書として刊行した。
2 研究成果は検定教科書の執筆などにも生かされている。
3 世界の社会科授業を調査し、授業改善の方策を探っている。
4 世界の研究者と「社会科」の理論と実践をめぐって学術交流を図る。
5 「なぜ・なにを・どのように」教えるかを追究できる教師を育てる。

私の研究テーマ MY RESERCH

●自主的自立的な思想形成のための地理歴史教育

個人の価値観を尊重し、それを保障する民主主義社会にとって、当事者に意識させない思想統制ほど恐ろしいものはありません。価値の多元性と思想の自由を社会発展の原動力とする民主主義社会において、学校は、地域や家庭とは異なる教育機能を担っています。それが、子どもが自らの思想や判断基準を自主的自立的に形成することをサポートする学校教育であり、社会科教育です。自分なりの社会の見方を構築できる子どもを育成しようとすれば、「科学的知性」と「批判的合理的精神」を育成するしかありません。そういう意味での「地理や歴史を通して社会の見方・考え方」を探究させる方法論が求められているのではないかと考えて、研究を進めています。

社会科の面白さと必要性を教えるための入門授業を開発したい。

生徒目線から教師目線へ、自分の成長を感じる

教師になりたいと思ったのは小学6年生の頃。友人に勉強を教える機会があり、教えることがとても楽しいと感じたことがきっかけです。社会科が好きだったので、そのまま社会科の教師を目指して教育学部に入学しました。3年次の現在、草原先生のゼミに所属しています。草原ゼミを選んだきっかけは、1・2年次の授業で、私たち学生にとても熱心に接してくださる草原先生のお人柄に触れたことでした。その頃の私は、単純に教師になりたいと考えていただけで、まだまだ高校生そのままの視点で教師や社会科という教科を捉えていたと思います。でも、草原先生の授業を通して、社会科とは何か、社会科はなぜ必要なのかといった社会科教育を幅広く追究する教師としての視野を持てるようになったと思います。この変化を大切にしながら、3年次後期の草原ゼミで教師を目指す勉強に集中したいと考えています。

“中1ギャップ”と社会科を結びつける導入単元を作りたい

最近、小学校から中学校へ進学した生徒が、学校生活になじめずに不登校などになる“中1ギャップ”といわれる現象が見られるようになっています。グループ授業や学外授業などに代表される、自由な雰囲気の小学生時代とは違い、科目ごとに先生が変わり、講義形式の授業が行われる学習環境の変化に対応できないことが原因の1つだと指摘されています。実際、中学生の不登校生徒数は、小学6年生に比べて6倍近くになるというデータもあるのです。

私は、この“中1ギャップ”と専攻している社会科を結びつけて、学習指導要領の目標を達成しながら、社会科学習に興味を持たせる、最初の段階から生徒が夢中になれる授業を作れないだろうかと考え、「中等教育社会科入門における導入単元の開発」というテーマを選びました。導入単元とは、中学1年生の最初に、今後3年間で学ぶ社会科の目的や意義を、分かりやすく教える授業。生徒に「社会科ってこんなに面白いんだ」、「だから社会科を勉強するのか」と思わせるようなオリジナルな単元を開発したいと考えています。

社会科は暗記科目ではなく、実社会への第一歩であることを子供たちに伝えたい。

教育学部 第二類 社会系コース
4年次生
中村 祥子
Shoko Nakamura

PROFILE

歴史好きの父親の影響で自然に社会科が好きになり、社会科の教師を目指す。歴史や地理を通して社会のしくみを教えたいと考えて、公民・歴史・地理という3領域を教えられる中学校の教師になることを目標にしている。3年次に中学校・高等学校の教育実習を終え、4年次には小学校の教育実習にも取り組む予定。

現在の草原ゼミには、2人の大学院2年次生と4人の学部4年次生のゼミ生が所属し、草原先生のご指導のもと、日々の研究に取り組んでいる。

人に伝わらなければ研究として成り立たない

ゼミが始まって間もない現在は、社会科授業の実践例収集と分析に取り組んでいます。図書館の専門誌や論文、インターネット情報を検索して実践例を収集し、実践タイプ別、目的別、実施内容別に分類、さらにどのような効果が得られたかを調査して分析します。それをレジュメにまとめてゼミで発表し、先生やゼミ仲間から講評してもらうのです。初めての発表では、実践例を網羅的に収集したことは評価してもらいましたが、研究動機の分かりにくさや、分類の仕方の甘さ、数字的なデータが不足しているなどの厳しい指摘も受けました。そこで感じたのは、自分が分かっているだけでは研究とはいえず、人にその内容が伝わらなければ研究として成り立たないということでした。この思いを生かして、さらに深く研究に取り組んでいきたいと考えています。

1 研究のための資料を探したり、発表のための資料を作成したりするためによく訪ねる教育学部A棟図書室。
2 ゼミでの発表は、毎回レジュメを作成している。ファイルに綴じ、自分の研究成果を大事にしていきたい。